

深沢七郎

*fukazawa shichiro*

花に  
舞う

日本  
遊民伝

深沢七郎  
音楽小説選

講談社文芸文庫

*Kōdansha Bungei bunko*



花に舞う  
日本遊民伝

深沢七郎音楽小説選

*fukazawa shichirō*

深沢七郎

常盤大学図書館  
蔵書章

講談社  文芸文庫

はな ま にほんゆうみんでん  
花に舞う・日本遊民伝  
ふかざわしちろう  
深沢七郎  
深沢七郎音楽小説選

二〇一三年七月一〇日第一刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2・12・21 〒112-8001

電話 編集部 (03) 5395・3513

販売部 (03) 5395・5817

業務部 (03) 5395・3615

デザイン——菊地信義

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

本文データ制作——講談社デジタル製作部

©Miyuki Sakai 2013. Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料は小社負担にてお取替えいたします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文芸文庫出版部宛にお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。



講談社  
文芸文庫

ISBN978-4-06-290201-4

目次

南京小僧

七

枕経

一六

浪曲風ポルカ

四九

花に舞う

五四

いやさか囃子<sup>ばやし</sup>

八九

江戸風ポルカ

一一九

木曾節お六（戯曲）

一二五

へんげそう  
変化草

一六七

日本遊民伝

二〇〇

解説

中川五郎

二六三

年譜

山本幸正

二七一

著書目録

山本幸正

二八〇

花に舞う  
日本遊民伝  
深沢七郎音楽小説選

*fukazawa shichirō*  
深沢七郎

講談社



文芸文庫



目次

南京小僧

七

枕経

一六

浪曲風ポルカ

四九

花に舞う

五四

いやさか囃子ばやし

八九

江戸風ポルカ

一一九

木曾節お六（戯曲）

一二五

へんげそう  
変化草

一六七

日本遊民伝

二〇〇

解説

中川五郎

二六三

年譜

山本幸正

二七一

著書目録

山本幸正

二八〇

花に舞う・日本遊民伝

深沢七郎音楽小説選



## 南京小僧

島のこの船着場から波は続いているのだが、寝泊りの港へは二日もかかるのだ。孫の秀雄だちを乗せた船は、今朝ここから寝泊りへ出てしまったのだが、まだ寝泊りへは着いてもないのだけれど。

ワシは、

（もう、どうしようもないのだ）

今、秀雄の弟の政次を連れて、追いかけるようにこの船着場まで来たのだが。

昨日も倅の為吉に、あれ程よく云っておいたのに、毎日毎日云っておいたのに、何回云ったか知れなかったのに。

「秀雄だけは寝泊りへはよせ」

と、あれ程云ったのに。

秀雄達は今朝、

「波にゆられてドンブリコ」

と唄いながら、あの南京小僧の歌を唄いながら出て行つたのだ。

昨日までワシの飯膳を運んできたのは秀雄だった。今朝はちんばの政次が運んできたのだ。

おととい、あの黒犬を追ッぱらつたのは秀雄だった。弟の政次にほえつこうとしたあの黒犬を、秀雄がいつでも追ッぱらつたのだ。あの黒犬は、ちんばの政次の杖を見るといつでも、襲いかかるのだ。

その前の日だ。ワシはあの黒犬のうしろにそつと廻った。棒を振り上げて、叩き殺そうとしたのだが、逃げられてしまった。

その前の日だった。意地の悪い島の子供たちは、黒犬をほえつかせて、首を掴んで政次のそばへ連れて行つて、政次が逃げまわるのを面白がっていたのだ。

その前の日だ。政次の持っている杖に、あの黒犬の奴がほえついていたのだ。政次がびゅうびゅうと杖を振り廻したのだ。それが島の意地の悪い奴等には面白かったのだ。政次がいつも助けを頼んだのは秀雄だけだった。

「秀雄だけは寝泊りへはよせ」

と、あれ程云ったのに。

秀雄達は今朝、

「ゆれるお船は木のお船」

と唄いながら、あの南京小僧の歌を唄いながら出て行つたのだ。

おとといのことだ。ワシが奥の部屋にいた時だ、世話人の友の奴が倅の為吉と長いこと話をしていたのだ。秀雄を寝泊りへやる話をしているのに違いないと思つたので、わしからも友の奴に、よく話そうと思つていたが、

（年寄りの云うことなど相手にしないのだから）

友の奴などは、そんな奴だからワシは黙つていたのだ。為吉に、よせよせとあれ程云つておいたのだから、まさか、友の奴の口車に乗せられるとは思わなかつた。

その前の日だ。為吉と嫁のトミが喧嘩をして、それも、みんな、ちんばの政次のこともとだつたのだ。トミも政次のために秀雄だけは寝泊りへは、よせよせと云つて為吉と争つたのだ。

為吉の云いぐさはいつでも、

「あんなちんばを何故育てた」

と云うのである。父親のくせに、そんなことを云つて、そんなことを今になって云われでもどうしようもないことではないか。

ワシも癩にさわったから、

「それじゃあ、どうでもして貰え」

そう云って政次を抱いて、為吉の前に突き出してやった。ワシはこんな年寄りだし、為吉などは政次を、自分の子供の政次を、どうして片づけてしまうか？ と、その外のこととはどんな智恵も浮ばないのだ。政次のめんどろを見てやるのは秀雄だけなのに。

島に冬が来て、木のないこの島で、ときどきしか燃さない炭でも、寝泊りから買わなければならぬのである。米だって同じことなのだ。島の冬は、倅夫婦は寝泊りへ稼ぎに行ってしまうけど、子供達やワシのような年寄りは、島にいるより外に仕方がないではないか。

「さあ、どうでもしろ」

と政次を突きだしても、為吉だって、どう仕様もないのだ。

「それだから、あの時に俺が仕末をすると云ったじゃねえか」

と、いつでもきまってるそう云うのだ。いつでもワシを責めるのだ。

「こんなにでかくして、いまになって」

そう云って、ワシが育ててしまったのを文句を云うのだ。政次のめんどろを見てやってくれる秀雄は、今朝、寝泊りへ行ってしまったのだ。

「秀雄だけは寝泊りへはよせ」

と、あれ程云ったのに。

秀雄達は今朝、

「南京小僧は力持ち」

と唄いながら、あの南京小僧の歌を唄いながら出て行つたのだ。

今朝、この船着場で子供達や女親達が騒いでいた。寝泊りから秀雄達を迎えに来た船がこの船着場に着いて、みんなワイワイ騒いでいた。ワシは船着場へ行くのが怖ろしくて、物置のワラの中へ頭を突ッ込んでいた。今年もいつもと同じように子供達は一人ずつ南京袋の中に入れられたのだ。子供達が女親達と別れるのを見させないように、隙を見ながら、ひよいと、すくうように南京袋の中に入れるのだ。そのたびに女親達の手には銭の袋が握らされるのだ。そして、知らぬまに南京袋が一つずつ船の上に運ばれるのだ。そうして寝泊りへ運ばれて一生涯、漁の船頭に使われるのだ。

秀雄も今朝、そうして行つたのだ。ワシは船着場へ行くのが怖ろしくて、物置のワラの中へ頭を突ッ込んでいた。

さつき、倅の為の奴は、迎えに来た船が持って来た焼酎をお膳の前に飾って、その前に坐っていたのだ。ワシがそのお膳を蹴とばして、

「売ったなッ！」

と怒鳴った。

為の奴は、

「今頃、そんなしらばツくれたことを云い出したりして」

そんなことを云って、ワシが売ることを承知したようなことを云っているのだ。

今朝、船の上で、子供達をつめた南京袋がごろごろしていたのだ。

袋の中から、

「出してくれ」

と、泣き出す声があるのだ。そうすると、世話人の友の奴が、泣き声を外の子供達に聞かせないように、でかい声で云うのだ。

「みんな、歌を唄うのだぞ、あの歌をでかい声で唄うのだぞ」

そう云って、友の奴が先に立って唄い出すのだ。

「波にゆられてドンブリコ」

と唄い出すのだ。そうして子供達も唄うのだ。

「波に揺られてドンブリコ

ゆれるお船は木のお船

南京小僧は力持ち

みんな強いぞエイコラシヨ